

第 53 回日本作業療法学会 参加報告 —作業療法のターニングポイント—

帝京平成大学 健康メディカル学部 作業療法学科 中本 久之

1. はじめに

今年度の日本作業療法学会は 2019 年 9 月 6～8 日の間、福岡で開催された。テーマは「作業療法研究のターニングポイント」とされていたが、研究に限らず、次のステージへのターニングポイントとなる 3 日間だったように感じた。そのため、本報告のサブタイトルは「作業療法のターニングポイント」とした。

2. 国際的視点

本学会では、2017 年の Asia-Pacific Occupational Therapy Symposium における台湾-日本のジョイントセッションに続き、学会 2 日目にジョイントセッションが開催され、台湾の Ching-yi Wu 氏からは、先端のロボットリハビリテーションについて紹介があった。近年、リハビリテーション医学会などのブースでも機器の目覚ましい発展を目にするが、それらが特に脳卒中患者に対する作業療法分野においても広まっていることを再認識した。本邦でも様々な機器が臨床に導入されており、一般演題でもアイトラッキングを用いた支援などの発表が増えていた。ジョイントセッションは早朝からの開始だったが、ほとんどの席が埋まっていた。英語に苦手意識のある作業療法士も多かったように思うが、少しずつ言語や文化へのマインドセットに変化が生まれてきているように感じた。

3. ロボット活用のための新たな視点

リハビリテーション機器の技術的な発展は、機器展示のブースや、演題発表からそのスピードに驚かされることが多々ある。一方で、これまでの機器

は必ずしも対象者の生活に馴染むものばかりではなかった。それはユーザーとなる利用者の理解が不十分だった可能性がある。学会初日の基調講演をされた吉藤健太郎(オリイ)氏は、一線を画す存在と言える。自身も含め全ての人の「孤独を救いたい」という思いから様々な開発を進めている。多くの開発の中でも、分身ロボット OriHime (<https://orihime.orylab.com>) は、障害を持ち自由に移動ができない方にとっては画期的な開発である。開発にあたっては、脊髄損傷や ALS などの重度障害の当事者の元に何度も足を運び、何に困っているのか、何を求めているのか、どうしたら色々な人との繋がりを作ることができるのかに耳を傾け続けた。そのプロセスはまさに私たち作業療法士と共通する点を感じた。一方で、自問もした。「クライアントから語られた目標に対して“それは無理じゃないか?”と諦めた経験はなかったか」と。改めて真摯にクライアントに向き合う必要性、そして様々なプロフェッショナルと連携する必要性を強く感じた。私たちは技術者ではないが、作業療法士としてクライアントがより豊かに暮らすためには、ありとあらゆる手段を試す行動力が求められる。

4. おわりに

科学技術は日進月歩で変貌を遂げているが、作業療法は果たしてそのスピードについていくことができているだろうか。教科書に掲載される福祉機器も数年で時代遅れになってしまう。教育課程においても、学生には最新の情報を提供するとともに、学生たちがインターネットや SNS を通じてそのような情報に興味を持てるような工夫が必要と考えられる。今学会の参加者の多くは時代の変化を捉えたのではないかと思う。

帝京平成大学 健康メディカル学部 作業療法学科
〒170-8445 東京都豊島区東池袋 2-51-4